



四万十町
町内「ぶら〜り」散策

小鶴津

志和へ。志和川に沿って東へ下り、志和の集落を通り抜けて防波堤に突き当たったところを右へ少し山を登ると太平洋の絶景を望む断崖絶壁に沿って続く道が見える。ここをしばらく進むと小鶴津、大鶴津である。しかしこの道の入り口は通行止めの看板が立てられていて、集落に行くことは原則不可能である。小鶴津地区は平成30年6月に、大鶴津地区は平成26年2月に、住民が0となったのである。そもそも、両地区へ向かうための唯一のこの道路は、前述の通り断崖絶壁に沿った、しかも落石の多い険しい道で、住民がいなくなつてからはメンテナンスをほとんどできなくなり、危険度が増した。これにより、現地に行くことが困難になつたため、現在はごく限られた人以外、両地区の現状を知ることができない。そんな両地区であるが成り立ちは古い。

小鶴津、大鶴津ともに成り立ちは平安時代末期の平家滅亡の頃にさかのぼる。平家滅亡への流れが一気に進んだ「二の谷の戦い」は、あの「源義経による鶴越の逆落とし」で歴史上たいへん有名である。義経らの活躍もあつて、復権を画策していた平家は惨敗し瀬戸内海へ逃れる。その後、屋島、壇ノ浦へと敗走を続けることになるのであるが、この一の谷の戦いに敗れた平家軍の一部が、本隊に続くことができず、太平洋に出て、ここ小鶴津にたどり着いたと伝わっている。人里離れたところで生き延びてきたという日本各地にある平家の落人伝説の例に漏れず、この小鶴津も、追っ手から逃れるのはうって

つげの場所だつたに違いない。小鶴津は、戦国期の地検帳ではまだ村になつていなかったようであるが、江戸末期には村（小弦津村と記載）として、みまも名本という、いわば村長のような役職が置かれていたとある。戦国期、志和氏の家老で島岡（島岡）丹波という人が小鶴津を取り仕切つた。島岡丹波の菩提寺で、養清庵というお寺が江戸初期まで存在したという記録がある。さらに、この島岡の家系図が残っている。「島岡」は、何代目かで「嶋岡」となる。そして江戸末期に、嶋岡義久という人の子・傳藏が「鶴嶋（鶴嶋）」を名乗る。これは、鶴津の嶋岡という意味である。以降、鶴嶋家として続いていくことになる。現在、鶴嶋姓は町内に一軒だけあり、志和の町で「鶴津の嶋岡」を守っておられる。

その昔は、塩炊き（製塩業）が盛んに行われていたという小鶴津は、瀬戸内海沿岸での大掛かりな製塩業の発達とともに徐々に衰退。それでも人々は粘り強くこの地で生き続けたが、前述の通り平成30年が地区の歴史の区切りとなつた。



塩炊きが行われていたとされる海岸を、通行止めとなつている道路の入り口から望む。

町のうごき		人口		前月比		出生		死亡		転入		転出	
男	7,899	-15	男	3	9	9	18						
女	8,690	-11	女	5	8	7	15						
計	16,589	-26	計	8	17	16	33						
世帯数	8,390	-8	(6月中の届出)										
窪川地域	11,740人	大正地域	2,318人	十和地域	2,531人								

四万十川の水質状況		適正值(mg/l)		7月14日	
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下			
硝酸	≤ 0.5	0.598			
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下			
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.05			
化学的酸素要求量	≤ 10.0	2.02			

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部